



モンゴルの マンホール・チルドレン にホームを！

トーチ・トリニティ神学大学院、異文化学部
高見澤栄子

創り主の御名を称え、全ての栄光を主に捧げます。

みなさまいかがお過ごしですか？ いつも、お祈りやはげまし、暖かい交わりを心から感謝します。このたび、昨年から神様が新しいことをして下さっていることにお分かちさせて頂きたくて、ニュースレターをしたためました。この数ヶ月で驚くような神様の導きを体験しております。大げさに言ったら使徒行伝の続きを歩んでいるような毎日です。よろしかったらお読みくださって、神様のすばらしい御働きを共に体験し、ともにほめたたえて頂けたら幸いです。

栄子

マンホール・チルドレンとは？

モンゴルではホームレスの子供達はマンホール・チルドレンと呼ばれます。彼らは零下 30 度まで気温が下がる冬に、温水パイプのあるマンホールの中で暖をとって生き延びているからです。マンホールの中は光も入らず、衛生状態も悪く、危険なことも起きるのですが、彼らには他に行き場がないのです。

I. いきさつ

1998 年の NHK 番組

初めてマンホール・チルドレンの事を知ったのはテレビ番組を通してでした。1998 年に NHK がモンゴルのマンホールに住む 3 人の子供を追う番組を制作、放映しました。番組の中で、まだ 10 才そこそこの 3 人の子供、ボルド、オユナ、ダシャがマンホールの中で助け合って生きているのを見てとても心が痛みました。でもその時は自分もまだなんとか生活している神学生で、何もすることができず、ただ、「神様、この子達をおまもりください。そしていつかはこの子達のために何かをしたいです。」と祈りました。

2008 年の NHK 番組

そして昨年（2017 年）、インターネットの動画サイトに「10 年後のマンホール・チルドレン」（2008 年制作）というタイトルを見つけました。それは、あの 3 人の子供たちの 10 年後を映したものでした。3 人は、それぞれが人生の厳しさに直面していました。ボルドはアルコール依存で暴力沙汰を起こし定職はなく、2 人目の女の子オユナはアルコール依存と自死念慮があり、そしてダシャは身分証明も教育もないので、ゴミ集めの仕事で家族 8 人を何とか養っていたのです。

10 年間、社会も私自身も彼らのために何もしてあげられなかったことが、彼らがアルコール依存、自殺志向、厳しい労働という人生を余儀なくしているのだと感じました。そしてその映像を見ながら、イエス・キリストが、「おまえ達は、わたしが空腹であったとき、食べる物をくれず、渴いていたときにも飲ませず、わたしが旅人であったときにも泊まらせず、裸であったときにも着る物をくれず、病気の時や牢にいたときにも尋ねてくれなかった。」（マタイ 25:42、43）とおっしゃった言葉が心に迫ってきて、すぐにでも彼ら

のために何か行動を起こさなくてはならない、と思
いました。



ダシャに、そして今もまだマンホールに暮らす子
供たちに、二つのメッセージを届けたい、という強
い思いが湧きました。「あなたは自分の父親に見捨
てられたと思っているでしょう？ いいえ、天に本
当のお父さんがいて、あなたを愛し、素晴らしい将
来と希望を与える計画をもっていてくれるのです
よ！」そしてもう一つは「世界中だれも自分のこと
など心配してくれる人などいない、と思っているで
しょう？ いいえ、私の友人達が日本から韓国から、
アジアの国から、たくさん今あなたのために祈っ
てくれていますよ！」という二つのメッセージです。

最初の一步、最初の奇蹟

先ず心に浮かんだのは、この番組が追った三人に
是非会いたい、ということでした。しかしモンゴル
の人口は 300 万人、住所も身分証明書もないこの 3
人をどうやって捜しだすことができるでしょう。不
可能な現実に悲観的な気持ちでしたが、とにかく祈
りました。祈りのパートナーにも頼んでなんとか見
つけ出せるように一緒に祈ってもらいました。そし
て翌日、私の勤務する大学にいるモンゴル人の学生
ガナオトゴンさんと呼んで、事情を聞いてもらった
のです。すると、「僕の教会にアルコール依存から
解放された男がいて、以前テレビに出たことがある
と言っていましたよ。」と話してくれたのです。そ
の人物の名前を聞いたら、ボルド、あの番組の少年
と同じ名前です！ しかし、まさか、こんな偶然は
あり得ないと、すぐには信じられませんでした。確
認のため、写真をモンゴルから送ってもらったと
ころ、それはまさしくあのマンホール・チルドレン 3
人のうちの 1 人、ボルドでした！ 感激すると同時
に、神様が「今、何かをはじめよ」、と言われてい
るような促しを感じました。それで、さっそくこの
ガナ牧師の協力を得て、モンゴルとのやり取りを始
めたのです。ボルドを通してオユナとダシャの消息
も聞くことができました。ダシャは今新しい家族を
もって子供 3 人とゲルで生活をしていること、相変
わらずゴミ回収の仕事で家族を養っていること、そ
して、オユナはとても悲しいことにすでに他界して
いることを知りました。オユナを思って心がとても
痛みました。二人目のオユナをだしてはいけない、
そんな思いに駆られました。

そして、今もマンホールに暮らしている子供たち
に、なんとか安心して眠れる暖かい場所を提供した
い、という願いが起きました。当時放映された番
組の情報では、約 4000 人の子供がマンホールに生
活している、とのことでしたが、今ではその数が激
減しているのだそうです。主な理由として、国家の
対策として孤児院が建設され、諸外国からの NGO
の援助があったからと言われていますが、4000 人
ものマンホール・チルドレンを収容できないことと
は一目瞭然です。それなのに数が減っている理由は
なぜか？実は悲しいことに多くの子供たちが人身売
買の犠牲になってしまったというのです！ そして
今なお少なくとも 100 人くらいの子供たちがマンホ
ールに暮らしていると聞きました。少しでも早く、
一人でも多く、次の冬が来る前に安全な場所を提供
しなければ、と考えるに至りました。

II. 初めてのモンゴル訪問

ガナ牧師が、2 月の末にモンゴルに一時帰国する
ので、その時に一緒に来ませんかと誘ってくれまし
た。ボルドやダシャ、そして教会のリーダーに会う
ために一週間のモンゴル行きを決めました。訪問の
一週間、毎日が神様の導きの中で進み、教会のリー
ダー達と話し合いができ、マンホール・チルドレンの

働きをリサーチしている専門家からも情報を聞くことが出来ました。マンホール・チルドレンにならないためには、親を教育することが最重要項目だということも聞きました。またこの地で長く宣教活動をしている韓国人宣教師や日本人宣教師にもお目にかかることができ、貴重な意見やアドバイスを受けることができました。売りにだされていた建物も見に行き、大人のアルコール依存者のための教会のミニストーリーもいくつか見る事ができました。



何よりも大きな感動は、ボルトとダシャに会えたことです！あたかも 20 年間離れていた子供にとうとう会えたような感激でした。彼らも私の話をきいてうれしく思ってくれたようです。ボルトはクリスチャンの信仰を持ち、教会にしっかり繋がっていて、感謝の思いから月に一度の教会の交わりの間食を献げているということです。また小さなタイヤ修理工場を経営し、時折、マンホール・チルドレンにも仕事の機会を提供しているとのことでした。ダシャは引き続きゴミの回収の仕事をしています。産まれた子供達のために、借金をしてゲルを得て暮らしていました。最近「マンホール・ファミリー」という貧困問題も現実にあるようです。貧困ゆえにダシャの子供達や家族がマンホールに行かなくて済むためには、ダシャが生活を続けられるようにするサポートが必要だと思いました。



「主の栄光コミュニティ教会（以下主の栄光教会）」

ガナ牧師が創立し、牧会してきた「主の栄光教会」は現在、会員は老若男女合わせ 70 名前後です。若者もいろんな活動に積極的に参加して教会を支えています。アルコール依存者のための回復のミニストーリーとしてのグループホームもボランティアによって運営されていました。実はボルトはこの働きからの初穂だそうです。また親が服役している子どものためのプログラムなど、社会全体の問題に積極的に携わっていました。毎週の礼拝にはアルコール依存者のためのグループホームから 10 人近く参加しており、この教会がこの面でもマンホールの子供達の働きを始めるのには、これらの働きをしていない教会よりも準備ができているのではないかと思いました。



III. プロジェクトの構想

「マンホール・チルドレンが安心して暮らせる場所、生活訓練を受けられ、将来の自立を目指した学びの場となるホームを、モンゴルの教会を通して作りあげる。」

グループホーム型の施設

当初の計画では、シェルターもしくは孤児院のような施設を考えていました。しかし、大きな建物を建てるとその管理と維持はむずかしく、結局はモンゴルの教会の負担になるのではという懸念がありました。そこで、モンゴルで 20 年以上仕えている P 宣教師の助言を受けて、グループホームのような規模（6～8人ぐらい）の『家』作りへとプロジェクトを変更しました。この形態ならば、子供達が単に

寝泊りするだけでなく、家庭のような雰囲気の中で安心感を得て生活できます。また生活全般の訓練と学びを通じてより一人一人に目を留めたケアを目指せるのではないかと思います。また、モンゴルの現地教会も海外からのサポートが終了した場合、管理維持が可能でしょう。

この「家」スタイルで、子どもたちを保護しサポートするためには、子どものケアについてのスペシャリストの招聘と、ボランティアの訓練、また適切な家探し、内装の準備などが必要です。

将来の可能性

グループホームでは、親がわりの養育者が、子供達に食事の準備や掃除、洗濯などの生活訓練をするとともに、時には外部のさまざまな分野の専門家を招いて特別講義、音楽やアート、さまざまな技術やコンピューターなどを教えることもできます。子どもの興味と賜物に即した学びの機会を提供することで、生活の基礎作りとともに自分の賜物を伸ばし生かすことができたら、彼らが自立の道を歩みやすくなります。さらに、自分たちで食べる野菜や果物などを栽培して神様の下さった恵みを味わえたら、命を豊かにもつことができるのではないのでしょうか。このようなシステムでは、海外からの短期・中期・長期のボランティアによる奉仕もおおきな励ましになると思います。日本や韓国など海外からのボランティアによって交わりを深めながら子どもたちが新しい技術などを習得する機会が持てたら素晴らしいと思います。

。



ホームの候補の家の1つです。7つの部屋と2つのトイレ、2つの井戸、町中からの距離、幹線道路脇、教会役員のおいえから5分、守衛の家のある理想に近い家が見つかりました。

段階的アプローチ：年代の考慮と今後の発展の視野

モンゴルでマンホール・チルドレンの調査をしているスロンガさんから学んだ事は、「子供達の成長を考慮した働きをしなくてはならない」という点、また、「マンホール・チルドレンは必ずしも孤児ではなく、親がいるのにアルコール依存や虐待があって家には居られない場合や、親が子供を稼がせるため、当てもないのに都市に送りだしてしまうことが理由の場合が多いので、問題解決のためには、防御策と救済策として、子供だけでなく、大人へのアプローチなど、多面的なアプローチが必要である」ということでした。そこで、プロジェクトの一部として、大人アルコール依存者のためのミニストリーを励まし支えることも視野に入れる必要があると思いました。

今回、私達は、「主の栄光教会」の規模とこれに当たることができる物質的資源や人的資源を考慮して、計画を段階的なものにしたいと考えています。

第1段階：（2018年の冬まで）

- * 「グループホーム」となる不動産の調査と取得（賃貸か、購入）
- * 家のリフォーム、受け入れ準備
- * ケアテイカー養成のためのスペシャリスト派遣&モンゴル教会員の訓練
- * 5~8才の子供（6人ぐらい）の選択と入居。

第2段階：（2019年秋まで）

第一段階の経験をもとにして、ホームの2軒目、可能なら3軒目を建てる。訓練をうけたスペシャリストを招聘して（必要なら海外から）、その指導のもとにケアテイカーを育てる。オンザジョブトレーニングで小学生レベルの子供達の生活訓練と教育を進め、いずれ公立学校へ通えるようにホームで訓練をして、公立学校へ送り出す。

3段階：成長した子供たち用（10-17才）のホーム

を作り、年齢に即した生活と訓練をする。この段階の子供達が、幼い子供のケアテイカーとなれるように励ます。前段階までのと同類のホームを増築して、マンホール・チルドレンをなるべく多く収容していく。ケアテイカーや教師の養成を進める。

現地教会の活動として

なによりも重要なこととして、このプロジェクトの担い手は「現地の教会」だということです。モン

ゴル人の教会やクリスチャンが、この働きを神様から与えられた自らの使命として受け取って立ち上がり進めるとき、自力の活動への発展が期待できます。海外の者は、自分達にできることをもって、その働きを脇から祈り励まし支えることが役割だと考えています。モンゴルを訪問して分かったことですが、宣教団体が建てた孤児院のいくつかがすでに閉鎖されていたのです。政府によって閉鎖されたり、宣教師の帰国の後継ぐ現地人がいなかったために閉鎖を余儀なくされたことが主な原因です。ですから、私たちは現地の教会が担っていけるプロジェクトを立てて、応援することが重要な課題だと考えます。今回、このビジョンを共有してくれているのは、トーチトリニティの学生のガナオトゴン牧師が創立したウランバートルの「主の栄光コミュニティー教会」です。現在はデビッドナムスライ伝道師が牧会をしていますが、この教会の役員達はみなこのプロジェクトに賛成して、自分達にできることをしていくと決意してくれました。この教会は会員が 70 名程度

なので、この教会にできることをプロジェクトの初期段階として立て上げることが必要だと考えています。いずれ、モンゴルの別の教会がこれに賛同して加わることもすばらしい共同作業となると思います。

IV 私たちができる事

1. 祈りの輪を拡げる。
モンゴルのホームレスの子供のためのお祈りをしてくださる方の名前と連絡先のリストを作り、祈りの課題を提供していく。
2. マンホール・チルドレンのために、モンゴルの教会がグループホームを作る支援をする。
3. ボランティアとしてモンゴルの教会の活動を援助する

VI 祈りの課題

1. マンホール・チルドレンが神様に与えられた人生を最高に生きることができるように。
2. 関わる全員が神様の御心を求め、聖霊の導きに従って 一人一人に与えられた役割を担うように。
3. プロジェクトに必要な人材・資財が備えられるように。特にホームレスの子供のケアのスペシャリストとそれを支えるモンゴル人奉仕者たちが与えられるように。
4. モンゴルの「主の栄光教会」とこれに関わるすべての教会が祝されるように。
5. このプロジェクトを通して神様の栄光が表されるように！

V. テーマ聖句

「わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。。。それはわざわざではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。」

エレミア 29 章 11 節

このプロジェクトに当たって与えられたのはこの御言葉です。エレミアの時代は、神様の民として選ばれたユダヤの民が御声に背いて生きただけで、国の分裂と異邦バビロニアに捕囚させられるという悲しい状況の中におりました。この絶望の中で再び神が語られたのがこの言葉です。神様は創造の初めからすばらしい命と賜物とご計画を、創られた一人一人にもっておられます。どんなに情けない状況におかれていても、この神様の愛と憐れみは変わることがありません。ですから御言葉に聞き従うとき、人はその本来の生き方を回復することができ、イエスキリストの下さった贖いのゆえに、生きることができ、豊かな命をもつことができるのです。この神様の御計画がマンホール・チルドレンの一人一人に回復されるように、という願いをもって、この御言葉をテーマ聖句とさせて頂きました。

支援の項目

このプロジェクトに賛同してくださる方のために口座をお知らせさせていただきます。(TPCのご協力を頂いて口座を使わせて頂いております。)

必要額

第1期(2018年9月30日まで) 1000万円 (1軒のホーム)
第2期 (2019年9月30日まで) 1600万円(2軒のホーム)

希望する指定を明記して頂いたらその用途につかわさせていただきます。

指定の例

1. グループホーム建設、内装、ヒーティング設備のため
2. 子供達の生活と教育のため(食費、生活費含む)
3. ケアテイカー(現地担当者)の教育と訓練、謝礼のため
4. 防衛策としての大人の回復プロジェクトのため (ボルドとダシャの支援含む)
5. 日本等からの奉仕者支援のため
6. プロジェクト全体
7. 事務運営・プロモーション等
8. その他 特別指定

振り込み先 (東京プレアーセンター内)

郵便局(ゆうちょ銀行)から

振込み口座(振替口座)
記号 00190-9
番号 587626

他銀行から

店名 019(ゼロイチキューウ)
預金種目 当座
口座番号 0587626
口座名称 新TPC準備会



「モンゴルのマンホール・チルドレンにホームを！」(仮称) プロジェクトチーム

代表:高見澤栄子

日本チーム:渡辺まゆみ、丸山玲子、末広恵子

韓国チーム:申一秀、金善敬、

モンゴルチーム:ガナ・オトゴン牧師と主の栄光教会、韓ヨンフン

連絡先:高見澤栄子 (電話 82-10-7182-9932、メール:e.takami@ttgu.ac.kr)

事務局:渡辺まゆみ (電話:04-7103-6260, メール:watanabemay@icloud.com)